

＜大きな葉っぱ＞のギボウシが白い蕾を付けてから随分と日時をかけてようやく少し青味のかかった白い花を咲かせました。ギボウシは漢字で擬宝珠と書きます。牛若丸が京の五条の橋の欄干に飛び乗りナギナタを振り回す弁慶と戦っている絵を見たことはありませんか。欄干を支える柱の天辺に付いている先の尖った丸いものが擬宝珠で、ギボウシの花芽の形がそれに似ています。



＜ギボウシの花＞

＜日が昇る＞とともに菱(しぼ)みだすのがマツヨイグサ(待宵草)で、花は夕暮れから一晩の命です。ビオトープの入り口の斜面にひっそりと咲いています。この花の黄色は今の季節に咲くヒマワリやキンシバイなどと違って淡い儂い感がします。竹久夢二の“待てど暮らせど来ぬ人を宵待ち草のやるせなさ今宵は月も出ぬそうな”という歌と絵にぴったりです。ところで夢二はなぜ待宵草でなく“宵待ち草”としたのでしょうか。



＜朝のマツヨイグサ＞

＜真夏の池＞にはヒシが似合います。岸边にはアシやガマがあり足元にはミゾソバやセリが生えていて、空には入道雲、そしてアブラゼミとキリギリスの鳴き声。こんな情景が思い浮かびます。ビオトープの池ではヒルムシロに虐げられていたヒシが勢いを盛り返し元気一杯です。白い小さな花を咲かせ、もう小さな実も付けています。



＜ヒシ＞



＜ミゾソバ＞

池の周りにはミゾソバが沢山育っているのですが花も蕾もまるで無し。流れの中でセリに混じってやっと見つけました。可愛らしいピンクと白の花です。

＜国作りの神話＞ガマが最近まで纏っていた苞を脱ぎ捨て穂を出しました。赤茶色のソーセージのような部分は雌花の集まりです。その上の細く尖ったところが雄花の集まりで、黄色の花粉は“蒲黄(ほおう)”という傷薬になります。古事記の稲羽之素菟(いなばのしろうさぎ)



＜ガマの穂＞

では、ワニ(サメのこと)を騙して皮を剥かれて泣いている白兔を大国主命がガマの穂で治療し元気にしてやるという話があります。蒲黄が効いたのでしょう。(文と写真：松本正勝)